

哲學研究

第二百五十二號

第三十二卷
第三冊

實踐と對象認識

——歷史的世界に於ての認識の立場——

西田 幾多郎

—

對象認識といふことを考へる人は、對象界といふものは、我々がそれを考へると否とに關らず、それ自身によつて存在するもの、時を越えたものと考へる。併し如何なる意味に於て、それを超越的と考へるのであるか。カント學派に於ては、知識は認識主觀の綜合統一によつて成立すると考へ、思惟的當爲の世界を客觀的對象界と考へる。併しそれは所謂心理的作用を越えたと云ひ得るであらう。眞に我々の主觀を越えたものと云ふことはできない。それは何處までも主觀的な世界、現象の世界たるに過ぎない。物自體の世界ではない、物自體の世界は不可知的である。無論内容なき思想は空虚であると云つたカントは、知識の客觀性を感覺の制約に置いて居る。併し、カント哲學の立場

からは、物自體は何處までも不可知的でなければならぬ。それは唯消極的に極限概念として考へられるだけのものである。そこに哲學史上色々に論議せられた所謂物自體の難問があるのである。

知識が眞に客觀的であるには、それは物自體の世界の知識でなければならぬ。對象は當爲ではなくして實在そのものでなければならぬ。眞理とは我々の意識内容と實在との一致である。是に於て所謂模寫説といふものが考へられる。併しそれには又種々の難問が呈出せられるのである。所謂認識論者の立場からは、思惟内容が實在と一致するか否やを知るには、先づ實在といふものが知られてゐなければならぬ、存在の前に當爲があると云ふ。實驗によつて外部知覺的に知ると云つても、實驗には理論といふものがなければならぬ。理論なき知覺は盲目的である。或は理論も歴史的・社會的實踐から發生したものと云ふことができるであらう。併し實踐には何等かの目的といふものが中心とならなければならぬ。かゝる立場からは、プラグマティストの如く知識は唯道具的と考へられるの外ないであらう。無論知識が道具的と云つても、その故にそれが單に主觀的といふのではない。道具は客觀的なるが故に、道具であるのである。斯くすれば斯くなるといふことは、實在の一面を映すものでなければならぬ。然らざれば、知識は實用的ではない。併し知識は實在の一面を映すと考へられても、主觀的な實踐を中心として考へるのでは、それ自身に於て獨立な實在の知識とは云はれない。我々人間の實踐といふものが如何なるものであるか、それが何處から出

るかが問題である。

人間の本質を理性的とすれば、「眞理への意志」といふ如きものも考へることができるであらう。そしてそこにはプラグマティズムとカント認識論との結合を考へることもできる。併しそれによつて、衝動的要求の主観性を越えて知識の客観性を立てることができるとしても、それはカント哲學の客観性に過ぎない。之に反し、實踐の底に何處までも主體的なものを考へるかぎりには、實踐によつて實在を映すと云つても、それは實在そのものを映すとは云はれない。實在そのものを映すと云ふには、主體といふものが全然受働的でなければならぬ、單に映す鏡の如きものでなければならぬ。而して全然受働的なものは、無に等しきものでなければならぬ。そこでは實踐といふことも無意義となる。實踐といつても、要するに客觀的なものの運動といふものに外ならない。單に客觀的な物の運動から映すといふことは出て來ない、即ち意識といふものは出て來ない。物が物自身を映すといふことは、物が絶對に自己自身を否定することではなければならぬ。自己自身を映す物質は辯證法的でなければならぬ。それは主觀的たると共に客觀的なものでなければならぬ。

主觀客觀の對立から出立して、主觀の立場からすれば、知識は何處までも主觀的たるを免れない。意識一般に至つてもそれを脱することができない。内在的立場から出立するといふ人も同様である。然るに知識は何處かで對象を映すといふ如きことがなければならぬ。少くとも對象に對應

するといふことがなければならぬ。之に反し、客觀の方から主觀を否定した立場からは、知るといふことは出て來ない。意識に映された物の映像といふのは何であるか。それが實踐的として又物に働きかけるものならば、それも物として客觀的な物と物との關係でしかない。單なる映像と考へるか。それは何の働きをもなさないものでなければならぬ。實踐といふものもない。加之、單なる物の世界から物ならざる映像といふ如きものは如何にして出るのであるか。

我々は世界の外から世界を知るのではない。我々は固、世界の外にあるものでもなければ、又我々が全然世界の外にあるものならば、世界を知るといふ如きことも不可能である。主客相對立し關係すると考へられるが、絶對に相對立するものが如何にして關係すると考へ得るであらうか。知る我々も亦世界の中に居るものでなければならぬ。我々が知るといふことも、世界に於ての出來事ではなければならぬ。その意味に於て、知るといふことも、一種の實踐でなければならぬ。而して實踐といふことは制作でなければならぬ。何等かの意味に於て制作でない實踐といふものはない。主觀によつて客觀を變ずることが實踐である。併し變せられたものは亦我に對して立つたものでなければならぬ、然らざれば實踐といふ意義がない。斯く實踐が制作であるといふことは、實踐とは普通考へられる如く單に主觀的に起源するのではなく、又客觀的に起源するといふことで

なければならぬ。單なる意識から物を動かすことはできない。物を動かすには、自己が先づ物でなければならぬ、我々は身體を有たなければならぬ。我々が身體的であるといふことは、我々の自己が歴史的であるといふことである、我々は歴史的世界から生れるといふことを意味する。我々の行爲が實踐であり、實踐が制作であるならば、それは歴史的身體的自己から起るものでなければならぬ。斯くして我々が實踐によつて物の世界を變じ、我々の實踐が制作であることが可能である。而してそれがすべて歴史的出來事であると云ふことができる。

知るといふことをも實踐と考へることは、普通の考へからは、却つて反對に考へられるであらう。併し主知主義の人の様に、自己を見る眼の如くに考へ、世界を單に自己に對立するものと考へるならばとにかく、意識的自己といふものが、この世界に生れ、この世界に於てあるものであり、意識するといふことも、かゝる自己の働きとして、この世界そのものの變化でなければならぬ。世界の外から世界を映すのではない。意識するといふこと自身が、この世界に於て考へられねばならぬ。この世界に於ては、物は何處までも表現的でなければならぬ。意識面といふも、個人に附着するものではなく、歴史的世界の一面として現れるものでなければならぬ。我々が意識するといふことも、歴史的世界に於ての一種の形成作用である。我々の自己はコギトとしてあるのではなく、歴史的世界に於て働くものとしてあるのである。故に身體なくして自己がないと考へられるの

である。

從來の認識論は意識の立場から出立する。現象學は云ふまでもなく、カント哲學といへども意識の立場を脱却したものではない。意識一般といふも、心理的自己の極限に考へられたものに過ぎない。歴史的自己の立場ではない。對象論理の立場といふのは、反省論理の立場であつて、客觀的といつても抽象的意識の立場を脱したものではない。それは時のない立場である。従つて對象界と云つても、それは唯主觀に對する對象界であつて、主觀的對象界たるに過ぎない。實踐の立場といつても、實踐によつて映すなどと考へるのでは、意識の立場を脱して居るのではない。それはやはり意識を世界の外に置いて居るのである。世界の中にゐて、實踐そのことが世界の出來事でありながら、單に世界を映すといふ如き模寫説は考へられない。そこには別の認識論がなければならぬ。對象を映すと云はなければ、主觀的となるのを恐れるのかも知れないが、單に映される對象界といふものは死物たるに過ぎない。辯證法的に動き行く具體的實在は、單に之を映すとは云はれない。辯證法的に知るといふことは、映すといふことではない。然らざれば意識的自覺と擇ぶ所はないのである。

辯證法的に動くものは眞に生きたものであり、生きたものが自己自身を映すといふことは、自己

自身を表現することではなければならぬ、表現的に自己自身を形作ることではなければならぬ。例へば、藝術的作品は生命の表現である。云はゞ、それは生命を映すものである。併しそれは外から生命を映すのではなくして、それに於ては働くことであるのである。藝術的創造作用といふのは、單に主觀的に起るのでもなければ、單に客觀的に起るのでもない。それは主觀的・客觀的作用として、歴史的世界の自己限定として、即ち創造作用として生起するのでなければならぬ。我々は創造的世界の創造的要素として、藝術家ともなり得るのである。藝術は固、制作でなければならぬ、而して制作ならざる實踐といふものがない様に、實踐ならざる制作といふものもない。我々はこの世界の中にあり、我々が働くことが世界自身が變ずることでありながら、實踐によつて映すといふこと、即ち世界の中から世界を知るといふには、そこに藝術的に對象を映すといふ如きものがなければならぬ。主客對立の立場から出立する前に、認識論者は先づ藝術的創作作用といふ如きものに就いても深く考へて見るべきである。

藝術は遊戲であり、その内容は假相と考へられる。私は今それによつて映される内容について云つて居るのではない。唯その制作によつて對象を映すと考へられる創作作用について云つて居るのである。制作でない實踐はない。行爲的ならざる自己がないといふことは、要するに制作的ならざる自己がないといふことである。人間は固、ホモ・ファールベルである。物を作るといふには、我々自

身が既に物でなければならぬ、我々は身體を有たなければならぬ。この世界に於て作爲するに
は、自己はこの世界に於てありこの世界から生れたものでなければならぬ。この世界から生れる
ものにして、この世界の創造的要素として、この世界を變ずるといふことができる。實踐といふこ
とは單に主體的ではなくして、それは即客體的でなければならぬ。作るものが作られるものであ
る、この世界から生れるものが又この世界を變ずるものである。かゝる辯證法的過程に於ては、そ
れが絶對否定の肯定であるかぎり、即ち絶對辯證法であるかぎり、そこに映すといふことが考へら
れねばならない。映すといふことをその契機として含んでゐなければならぬ。自己の働きが意識
的自己の働きでありながら物から出て來る、即ち身體的である、物の世界の自己限定である。そこ
に作られたものが映すものである、物の映像であるといふ如きことが考へられる。働くことが見る
ことであると云ふことができる。我々の身體といふものは、かゝる意味に於て働くものである。藝
術的創作作用といふのは、かゝる意味に於ての制作であり、一種の辯證法的實踐であると共に映す
といふ性質を有つたものである。併し斯く云へば、人がすぐ考へる様に、それは世界が藝術的だとい
ふのではない。世界が實踐の世界であり制作の世界であるが故に、即ち絶對辯證法なるが故に、
之に於て藝術的創作作用といふ如きものが成立するのである。

藝術といふものも、主觀的作爲ではない。藝術にも眞といふものがなければならぬ。藝術の價値は感情にあるのではなく、藝術的眞にあるのである。併し藝術は唯受働的に對象を映すのではない。藝術は創作でなければならぬ。藝術の對象は生きたものでなければならぬ、生命そのものでなければならぬ。藝術が對象を映すといふことは、作品が生命自身の自己形成である、生命の自己表現であるといふことでなければならぬ。生命とは自己自身を形成するものであり、藝術的作品は生命の動きを表現するものである。我々は主觀的・客觀的なる物の世界から生れ、我々の身體が歴史的生命的の道具となることによつて、即ち技術的身體となることによつて、創作的となるのである。そしてかゝる創作が物を表現的に現すことであり、物を映すと考へられるのである。

かゝる關係を根柢的に理解するには、我々是我々の身體と考へるものの深い洞察から出立せなければならぬ。從來の認識論は、考へられたものから考へるものを考へた、作られたものから作るものを作つたと思ふ。時を越えた立場といつても、實はさういふものがあるのではない。それはやはり歴史に於て成立した立場である。知識は論理的媒介から出立せなければならぬと云つても、所謂論理といふものは歴史的世界から媒介せられたものである。我々の身體は働くものたると共に見るものである。働くものが見るものであるといふことが、私が身體を有つといふことであり、又身體といふものがあると云ふことである。而して又身體なき自己といふものはないのである。身體的に働

くといふことは物質的運動といふことではない。働くことが見ることであるといふことは、見ることが働くことであるといふことであり、それは表現作用的といふことでなければならぬ。我々は我々の身體を内から知るのでなく外から知るのである、要するに表現作用的に知るのである。我々の自己は行爲的直觀的に知るものである。無論、感覺とか知覺とかいふものに於ては、全く受働的であつて、そこには働くといふことがないと考へられるであらう。併しかゝる態度をも行爲的直觀的として見なければならぬ。「フォイエルバッハに關するテーゼ」に於て對象、現實、感性を唯、客體又は直觀の形式の下に捉へないで、感性的・人間活動的、實踐として捉へなければならぬといふ眞の意味は此になければならない。之に反し、全く我々の所謂身體的關係を離れた對象認識と考へられる場合といへども、私はそこに何處までも身體的關係を認めざるを得ない。私が歴史的な身體とか技術的身體とかいふものを唱ふる所以である。而して所謂身體といふものも、實は技術的な道具なのである。實在を基礎附けるものとして考へる感覺的なものとは、技術的に捉へられるものでなければならぬ。かゝる行爲的直觀の立場といふのが、我々に最も直接な具體的立場であつて、それが相矛盾するものの自己同一として眞の辯證法的立場といふことができる（私の所謂日常性の世界である）。我々はかゝる立場から、抽象的に一方に單なる物質の世界を考へ、一方に單なる意識の世界を考へるのである。然るに人は考へられた世界から考へる世界を考へようとする。唯物論者は唯客

觀的方向に主觀を越えた世界を考へる。故に意識を唯映すと考へる。それでは實踐といふこともない。又對象論理の立場に立つ人は現實の世界といふものを唯無媒介的な直覺の世界の如くに考へて居るのである。而して所謂對象論理はかゝる實踐の世界の媒介作用として成立するものなることを考へない。

世界が表現的に自己自身を限定し我々が行爲的直觀的に知るなどと云へば、人はすぐにも實在を藝術的に考へるとでも云ふであらう。併し歴史的實在の世界は唯我々の制作的身體の立場からのみ把握し得る世界であり、それは普通に感官的なるが故に實在のと考へて居る世界より一層實在的な世界であり、對象論理的に媒介せられたものなるが故に客觀的と考へられる世界よりも一層客觀的な世界である。それは對象的に自己自身を媒介する世界なるが故である。主客未分以前とか直接とかといふのは、我々が辯證法的に物を作る、即ち身體的に働く所にあるのである。眞に直接な對象といふべきものは、辯證法的に擱まれるものでなければならぬ。辯證法的に擱むといふことは、物が行爲的直觀的に形作られることである。始から知的自己の立場に立てば、直接なるものは無媒介的とか非辯證法的とか考へる外ないのである。併しさういふ意味の直接なものとは、論理的に作られたものである。考へられたものである。主觀に對立する所謂客觀界といふのは、却つて右の如き身體的世界から一方的に擱まれるものでなければならぬ。表現的に自己自身を限定し我々が行

爲的直觀的に知る世界といふのは、意識的自己の世界ではなくして、意識的自己が之に於てある世界でなければならぬ。意識的自己といふものが、外なる我々の身體を有つのではなく、我々は歴史的身體のとして、辯證法的に働くものとして、意識的なのである。我々は創造的世界の創造的要素として人間なのである。斯く云ふのは世界を人間的に見るのではなく、人間とはかゝる世界の要素であると云ふのである。眞の具體的實在界は人間を越え人間を否定すると共に人間を成立せしめる世界でなければならぬ。それは人間社會的に自己自身を述語する世界でなければならぬ。唯人間に對立し人間を否定する世界は、眞の具體的實在世界ではない。それは尙主觀を否定することによつて主觀に對立する主觀的世界である。唯否定的と考へられる相對的に見られる世界である。眞の客觀的世界とは我々に對立するものではなくして、我々を包むものでなければならぬ、之に於て我々を成立せしめるものでなければならぬ。

我々人間の行動は唯生物的不是、況して物質的運動ではない。それは意識的でなければならぬ、即ち行爲でなければならぬ。斯く云ふのは、人間が本能的に或は無意識的に運動せないと云ふのではない。我々は身體的存在であり、身體は物でもある。我々の行動も、世界が空間的に考へられるかぎり、物質的である。併し我々の行爲は時間的に物質の世界から起つて來るものでもない。又單に生物的世界から起つて來るものでもない。然らばと云つて、抽象的に考へられ

た意識から起るのでもない。生物的动作も形成作用である。併しそれは見ることから働くのではない。従つてそれは表現作用的でない。故に動物には、見るものが働くことであると云ふことはない。生物の動作は唯種的である。それは唯特殊化的作用である、動物は唯特殊である。それは自己自身を限定する個物でない。單に種を媒介とすることは、人間が動物的となることである。然るに我々の世界に於ては我々の行動は自己に對立するものより起るのである。何處までも我に對するものは自己自身を表現するものであり、我々が意識的に働くといふことは、我々が表現的世界の要素として、表現作用的に働くことである。即ち見るものが働くことであるのである。見るといふことと働くといふことは、抽象的な考へ方では、全然相反する兩方向と考へられる。併し我々が知覺的に物を見るといふことでも、身體的運動によつて見ると云ひ得るのである。我々が辯證法的に物を掴むと云ひ得るのである。而してそれは逆に辯證法的に働くことである、身體的に形作ることである。從來、直觀といふことを考へた人は身體といふものを忘れてゐた。直觀といふことは、身體がなくなることだと考へて居た。彼等は自分の足下を忘れてゐたのである。見るといふことも、働くといふことも、現實から離れて唯抽象的に考へて居たのである。故に直觀といふことが非辯證法的と考へられるのである。我々は見るといふことも、働くといふことも、此の歴史的現實の世界から考へなければならない、即ち身體的に考へなければならない。私といふものは、單なる軀として

あるのでもなく、單なる意識としてあるのでもなく、見ることが働くことであり、自己自身を形作る辯證法的存在としてあるのである。「私は茲にヘーゲルの「現象學」に於ての言語についての考を想起せざるを得ない」。Denn sie (Sprache) ist das Dasein des reinen Selbsts als Selbsts; in ihr tritt die für sich seiende Einzelheit des Selbstbewusstseins als solche in die Existenz, so dass sie für Andre ist. Ich als dieses reine Ich ist sonst nicht da; in jeder andern Äußerung ist es in eine Wirklichkeit versenkt, und in einer Gestalt, aus welcher es sich zurückziehen kann; es ist aus seiner Handlung wie aus seinem physiognomischen Ausdrucke in sich reflektiert und lässt solches unvollständiges Dasein, worin immer ebensosehr zu viel als zu wenig ist, entseelt liegen. Die Sprache aber enthält es in seiner Reinheit; sie allein spricht Ich aus, es selbst.....身體なくして自己といふものなく、自己は身體的存在であると共に、身體を道具として有ち自己表現の具となす身體的生命に於て、我々は既に自己疎外的でなければならぬ。逆に言語といふものは我々の身體的機能の延長でなければならぬ。我々の歴史的生命が自己疎外的であるといふことは、それが身體的であるといふことを意味する。直接的なもの、自己を否定するものが自己である、自己を成立せしめるもの、自己を生むものであるといふことを意味する。逆に又我々の身體は單に生物学的でなく、歴史的であると云ふことでなければならぬ。否、生物学的といふことは、既に歴史的といふ

ことであるのである。」

見ることが働くことであり、働くことが見ることでであると云へば、人は主語的に唯、一つと考へ、すぐに無媒介的とか神秘的とか考へる。併し然考へるのは、考へられたものから考へるものを考へるのである、對立から統一を考へるのである。然るに、現實といふものが主觀的・客觀的、客觀的・主觀的に、自己矛盾的なものであるのである。我々は身體的であり、制作的であるといふのは此故である。世界は主觀から客觀に進むのではない、客觀から主觀に進むでもない。又無差別から對立に進むのでもないければ、對立から合一に進むのでもない。現實はいつも自己矛盾的に形成せられたものであり、又自己矛盾的に形成し行くものである。世界は矛盾から矛盾に行く。現實の世界は自己矛盾に始つて何處まで行つても自己矛盾である。眞に生きるものはいつも自己矛盾の劍刃上に居るのである(唯それを知らないのである)。此故に見ることが働くことであり、働くことが見ることである。我々の身體は働くものであると共に見るものであるのである。身體的に見るといふことは、辯證法的に實在を掴むといふことであり、逆に辯證法的に働くことである。無論、私が茲に身體的といふのは、單に生物的身體をいふのではない。歴史的身體的に形成せられた現實を中心として、いつも相反する兩方向に、見るといふことと、働くといふことが考へられるのである。主觀客觀の對立とか、時間空間の對立とかいふのも、此から考へられるのである。現實の世界は絶對

に相反するものの自己同一の世界、自己矛盾の世界である。辯證法的世界に於ては、一つも媒介せられないもの、形作られたものでないものはない、單に與へられたものといふものはない。而してそれは又形作るものである、自己自身を媒介するものである。直接と考へられる本能的生命といへども、自己矛盾的でなければならない。それは辯證法的に自己自身を形成するものであるのである。

辯證法的運動といふことは、固、相反する働きの自己同一といふことでなければならない。例へば、生物的生命に於ても、生産が消費であり、消費が生産であると考へることができる。而してそれは生物的身体が自己自身を形成し行くことである。從來辯證法を唱へる人は、かゝる形成作用的方面を忘れて居ると思ふ。定立反立といふものが考へられても、その綜合の由つて立つ所が明にしてゐない。辯證法的自己同一といふものが、唯消極的に考へられて居る。直觀といふものが、辯證法的運動の外に置かれる所以である。併し相反する働きの自己同一が形成であると共に、形成といふことがなければ相反する働きの自己同一といふこともないのである。生物的生命に於ては、形成作用といふものが尙現實的でない、眞に辯證法的ではない。併し我々人間の歴史的生活に於ては、我々の行動は社會的でなければならぬ。生産も消費も社會的でなければならぬ。形態そのものが積極的意義を有つのである、現實的意義を有するのである。社會的形態そのものが作用を限定し

行くのである。かゝる立場に於て行爲的直觀を失つた時、云はゞ身體といふものが失はれた時、抽象的な形式的社會に墮するのである。單なる因襲的社會や、單なる手段が中心となつた社會となるのである。そしてそこには創造といふことがなくなる、生命といふものがなくなるのである。我々の社會的生活といふものは、見ることに働くことであり、働くことが見ることでありといふ矛盾の自己同一として成立するのである。故にそれは矛盾の自己同一として身體的である。社會とは歴史的身體的である。社會といふものが歴史の實在として、人間の行動が社會的であり我々の存在が社會的存在であるといふのは、之が爲である。生物的生命に於ては、働きといふものが本能的にして、見るといふことと働くといふことは尙眞に相反すると云へないが、人間に於ては、見るといふことと働くといふこととは絶對に相反するのである。故に人間のみ對象界を有つ。我々に對するものは單に抵抗でなくして又對象である。我々の身體のみ眞に働くものたると共に見るものである。人間にのみ、眞に見るといふことがあるのである。此故に我々の作用は眞に形成的である、即ち表現作用的であるのである。我々人間が道具を有つとか、人間は社會的動物であるといふことも、此から考へられるのである。生物的生命に於ては、生産が消費であり消費が生産であると云つても、尙それが直接的であるのである。直接的といふことは、その間に眞の反對がないと云ふことである。そこには未だ眞に斷絶の連續がないと云ふことである。普通には生物的身體が身體と考へられて居

るが、道具を有たない生物は尙身體を有たないのである。その生命は眞に辯證法的でない。眞に辯證法的である時、生命は社會的でなければならない。

經濟生活といふのも、固、生産が消費であり消費が生産であり、矛盾の自己同一として辯證法的過程である。併しそれは生物的生命に於ての様に直接的ではない。生産せられたものは、物として生産者から獨立したものである。而もそれが亦生産者を限定する、生れたものが生むものを限定する。絶對に相反する働きの自己同一として、歴史的身體的である。此故にその間に分配とか交換とかいふ過程が入つて来る。即ち社會といふものが入つて来るのである。而してそれは全體として一つの歴史的形成作用である。矛盾の自己同一といふことは形成といふことであり、形成といふことは矛盾の自己同一といふことである。經濟過程が社會組織を限定すると考へられると共に、後者が前者を限定する。それが一つの歴史的身體として自己自身を形成し行くのである。而して斯く自己矛盾的に自己自身を形成することが見るといふことである。そこにイデオロギーといふものも考へられるのである。斯く生産、分配、交換、消費が單に同一ではなく、有機的全體の肢體として、それ自身に於て繰返され、生産の或定つた形式が他の形式を限定し、又それ等の相互關係を限定する、併し又生産自身も亦他の契機から限定せられる。かゝる有機的全體を矛盾の統一として辯證法的と考へられるであらう。併しそれでも、唯、經濟生活の必然的過程といふものを考へるだけでは、そ

それは尙生物的生命の域を脱せない。生産と消費とが直接的に一なのでなく、その間に分配とか、交換とか、社會的なものが入るとしても、その根柢に於て生物的生命の社會的媒介によつて廣げられたもの、生物的生命の延長と考へることもできる。そこにはイデオロギーから働くといふ根據は考へられない。唯それだけでは働くことによつて見るとか、見ることによつて働くとかいふことはない。眞の辯證法的自己同一ではない。イデオロギーといふのは、唯、經濟機構の意識に映されたものと考へられる。かゝる考に徹底するならば、實踐といふ如きことは考へられない。結局運命的必然論に陥るの外ないであらう。「今かゝる問題に深入りすることはできないが、社會といふものはそれ自身に於て生きたものでなければならぬ、自己を有つたものでなければならぬ。斯くしてそれが自己自身の内から動き、自己自身から矛盾に陥ると云へる。矛盾の自己同一といふことができるのである。意識といふのは我々の身體に附着してその動作を映して居るものでなく、我々の身體的動作は意識的であり、意識作用は身體的でなければならぬ。我々の行動は歴史的身體的でなければならぬ。それは創造的として歴史的に物を作ることであり、逆に我々が身體的に物を見るといふことである。我々が身體を有ち、我々の存在が身體的と考へられるのは之に基くのである。

私は社會といふものも、歴史的身體的に成立するものと考へるのである。人間がホモ・フアーベルと云はれる所以である。生産といふことも、歴史的身體的に成立するのである。無論、形成せられた

社會があつて、社會的生産といふものが成立するといふに對しては、逆に生産様式が社會形態を定めると云はれるであらう。併し身體といふものがなくして意識的自己といふものはないと共に、意識的自己といふものなくして身體といふものはない。肉體から精神が生れると考へる如きは、古き唯物論たるに過ぎない。社會意識といふものが單に經濟構造を反映するものに過ぎないものならば、社會そのものはそれ自身に於て生きたものでなく、從つて自己自身に於て矛盾に陥るといふこともない。社會が自己矛盾に陥り、自己自身を否定して、次の社會に移つて行かねばならぬと云ふのは、社會的意識が眞實在に觸れないといふことである。眞實在を見ないといふことは、それが創造的でないといふことである、行爲的直觀的でないと云ふことである。實在は創造的なるものなるが故である。商品―貨幣―商品から貨幣―商品―貨幣に移ることによつて資本主義的社會が成立するといふのも、社會が自己形成的であるが故でなければならぬ。行爲的直觀的に即ち歴史的身體的に動き行く故でなければならぬ。貨幣を有つ社會といふのは、既に表現作用的に自己自身を限定する社會でなければならぬ。此故に市民社會に於ては、物が市價を有つのである。分配とか交換とかいふことも、かゝる社會の自己限定として可能である。かゝる歴史的身體的實在として、市民社會はそれ自身のイデオロギーを有ち、即ち自己を有ち、資本主義的社會へ動き行くのである。墮落するものは、固、自由なものでなければならぬ。自己疎外に陥るものは、固、自己を有つたものでなければ

ばならぬ。」

私が働くことと見ることとの辯證法的に一であるといふのは、生物の反射作用や本能作用に於て考へられる様に一であると云ふのではない。却つてその正反對である。相對立するものが、對象的に結び附くといふことは、それが辯證法的に一といふことでない。對象的に一と考へられるかぎり、如何に相反するものと云つても、絶對に相反するものではない。對象的に一と考へることは、無差別と考へることである。働くか見るかの何か一のものの連續に還元せられねばならない。辯證法的統一といふことは對象的には(例へば主と客との如く)絶對に結び附かないものの結合といふことでなければならぬ。私が無の限定といふ所以である。それは判斷的一般者の自己同一として一つといふのではない、即ち主語的に一といふのではない、個物的に一といふことではない。直接に結合すると云ふ時、いつもかゝる結合が考へられて居るのである。個物といふものも、主語と述語とが相反するものの自己同一といふことができる。併しそれが一つの個物として、直接に、無媒介的に一であると考へられる時、それは辯證法的自己同一ではない。之に反し、推論式的一般者に於ては、その兩端は直接に結合することができないと考へられねばならない。若し直接に結合すると考へるならば、推論式といふものではなくならなければならない。此故に推論式的一般者の自己同一は媒

語的でなければならぬ。推論式的一般者に於ては、既にその中心が媒語的なものであると云はねばならない。若し小語的方向に中心があるとすれば、その統一は結局個物的統一となるであらう。之に反し、大語的方向に中心を置けば、それは一般概念的統一と考へるの外ない。何れにしても推論式的自己同一といふものはなくなる。推論式的世界といふものが成立するのは、媒語的なものの辯證法的自己同一によると考へなければならぬ。それはその兩端の何れにも還元できない所に、推論式的自己同一があるのである。推論式そのものに特有な自己同一といふのは、現實の行爲的直觀的自己同一といふものでなければならぬ。我々は物を作る、併し物は作られたものでありながら、獨立なものとして我々を動かす。物が我々の行爲を呼び起すのである。消費と生産と消費との自己同一である。(そこにも既に制作的自然の意義が含まれて居ると思ふが)それだけでは尙主觀的自己同一と思はれるかも知れぬが、内から行爲すると考へられる自己そのものが、物の世界から生れるのである。是故に我々は客觀的當爲を有ち、又制作可能でもあるのである。我々は創造的世界の創造的要素として、物を作るといふことが可能であるのである。我々は世界の形成的要素として理性的なのである。行爲的直觀的に物が見られるかぎり、推論式が成立するのである。自然科学者の實驗といふものも、思惟的自己の行爲的直觀である。矛盾の自己同一たる行爲的直觀の立場から、一般的限定的方向に、或は空間的方向に、實體的統一が成立すると考へられるかぎり、

所謂推論式が成立する。之に反し、個物的限定の方向に、或は直線的方向には、内的自己といふものが見られるかぎり、當爲といふものが成立するのである。斯くして理論理性とか實踐理性とかいふものが考へられるのであるが、世界が推論式的自己同一、即ち理性的と考へられるのは、行爲的直觀の現實の自己矛盾的同一に基くものでなければならぬ。我々が身體的に物を見ると考へる所に、矛盾の自己同一があるのである。そこに時間と空間とか、内と外とか、何處までも結び附かないものが結び附いて居るのである。故に我々の自己は何處までも自己矛盾的實在であるのである。自己自身を維持する形といふのは、矛盾の自己同一によるのである。故に我々の身體的自己の底には、無限の不安があるのである（宗教家が身體的なものを虚幻と考へる所以である）。かゝる行爲的直觀的に自己自身を限定する一般者、形成作用的な歴史的自然を媒語とする一般者を、私は辯證法的一般者といふのである。それには外の方へも（主語的方向）、内の方へも（述語的方向）、限定せられた一般者を考へることはできない。それが直線的限定が即圓環的、圓環的限定が即直線的として、一即多、多即一の場所的辯證法である。眞の絶對矛盾の統一といふものは、此にあるのである。

矛盾の自己同一といふのは、絶對に相反する働きの自己同一といふことである。例へば、生産が消費であり消費が生産であると云ふ如くである。そこにはノエマ的にもノエシス的にも統一といふものは考へられない。主語的論理的に統一といふものは考へられない。故に生産者は必ずしも消費

者でなく、消費者は必ずしも生産者でない。その自己同一には、非連續の連續と考へられるものがあるのである。例へば、勞働者に取つては自己自身の生産した富が却つて自己自身を壓迫するものとなる。消費なくして生産といふものなく、勞働者は物を消費することによつて生産するのであるが、生物的生産作用に於ての様に、それが自己の消費となるのではなくて、却つて自己の生命を奮ふものとなるのである。何故に然るのであるか。我々の働きといふものが形成作用的であり、我々は形成作用的に働くものとして生きるものなるが故である。社會といふものは合成物とも考へることができるであらう。併し要素を離れて形といふものはないが、形といふものが要素を限定し行くのである。例へば、プロレタリアが資本を造り、資本がプロレタリアを作つて行くと考へられる。形といふのは單に關係といふものではなくして、行爲的に見られるものでなければならぬ。その底には深く歴史的に働くものがあるのである。我々が社會的であるかぎり、生産も消費も形によるのである。社會が非連續の連續として矛盾の自己同一であるかぎり、そこに見られる形といふものがなければならぬ。然らざれば、それは生物的生命であつて、社會といふものではない、即ち働くといふことと見るといふこととの矛盾的自己同一といふものではない。社會に於ては、要素は自己自身を限定する個物でなければならぬ、對象界を有つものでなければならぬ。その自己同一は行爲的直觀的に形を見るといふにあるのである(媒語的自己同一にあるのである)。見るとい

へば、唯觀念論的と考へられるかも知れぬが、經濟生活に於ても、我々がそれによつて生産し、それによつて消費するのである。

私は屢經濟生活の例を引いた、經濟生活も矛盾の自己同一として形成作用的であり、即ち社會的なるが故に、生産者は必ずしも消費者ではなく、形成を中心としてそこに階級鬭争といふものも成立すると考へることもできる。併し經濟生活といふもの自身が、歴史的生命の過程として現れ來るものでなければならぬ。それ故にそれは直線的なもの、歴史のものを含んで居る。歴史的生命の動きといふのは、何處までも相反する働きの自己同一として形成的でなければならぬ。而してそれは自己矛盾的に物を見るときといふことである。我々の知覺的生命と考へられるものに於ても、それは單なる本能とか反射とかいふことと異なつたものでなければならぬ。例へば眼と手との矛盾の統一によつて外に物を見るのである。故にそこから藝術的創作にも行き得るのである。更に徹底的に考へれば、本能作用といふ如きものについても、然云ふことができるであらう。但、それに於て、未だ形が獨立的でない。形が獨立的であるといふには、形が見られなければならない。而してそこから働くといふことが、創造的といふことである。生産といふことは働くことである。消費といふことは受用すること、云はゞ見ることである。自然が形成作用的として辯證法的といふのも、此から考へなければならぬ。自然現象の成立そのものの深い分析に基かねばならぬ。單に自然科學

の結果から抽象し一般化したものであつてはならない。時間空間の辯證法的自己同一として、物理的世界も右の如き意味に於て形成的であるのである。唯それは創造的でない、形は見られない。或は右の如く云ふのは、ゲネシスとポイエシスとを無差別に考へて居ると云はれるかも知れない。私はそれ等のものを無造作に一つに考へるのではない。人間は身體的存在たるのみならず、身體を道具として有つものである。生物的形成といふのも、アリストテレスの云つた如くロゴス的である、單なる意識から我々は何物をも作ることはできない。私は先づすべてを歴史的生命の形成の立場から見て、然る後、區別すべきであると思ふのである。

我々の生活は固、ゲマインシャフト的でない。ゲマインシャフトといふのは動物の本能的團體と異なつて、既に見るといふことと働くといふこととの辯證法的自己同一として、自己自身を形成し行くものでなければならない。生物的生命に於ても、我々が生れることが生むことである。而して本能といふものが、種そのものを維持して行くのである。本能といふのは一種の形成作用である。唯それは行爲的直觀的ではない。然るにゲマインシャフト的なのは行爲的直觀的に形成せられるものでなければならない。行動は歴史的身體的でない。結婚から、親子兄弟の關係も皆行爲的直觀的に形成せられるのである。經濟的生産様式といふものもかゝる形によるものでなければならない。人間の生命は固、自己疎外的でなければならない。我々の身體が働くも

のであると共に見るものであるといふ時、我々は既に自己疎外的であるのである。

私は推論式的論理といはれるものも、實は行爲的直觀的に物を見るといふ所から成立するのであると思ふ。そこに辯證法的論理の根據がなければならぬ。行爲的直觀といふものが、辯證法的一般者のコブラ的意義を有つたものでなければならぬ。上に云つた如く推論式的一般者の媒語的意義を有つたものでなければならぬ。當爲といふものも此から起るものでなければならぬ。我々が歴史的身體的に物を見る、即ち矛盾の自己同一として形を見るといふこと、そのことが矛盾であつて、我々の行爲そのものが何處までも自己矛盾でなければならぬ。自己矛盾的に物を見るといふことから當爲といふものが起るのである。故に客觀的當爲といふのは内からの要求ではなくして、外からの呼聲でなければならぬ（それは神の聲とも否絶對の命令とも考へられるのである）。我々が現實を越えたと云つても、いつも現實から現實を越えるのである。現實から現實を越えるとは不可能ではないか、それは自己矛盾でないかと云はれるでもあらう。然り、而も歴史的現實は自己矛盾なのである、自己矛盾なるが故に現實なのである。之を離れて絶對否定などと云つても、それは唯然考へるだけである。我々は通常身體の成立について深く考へることなく、身體といふものを單に生物的に考へ、従つて現實といふものも單に無媒介的などと考へて居る。併し我々の身體といふものは働くことによつて見、見ることによつて働くものでなければならぬ。我々の身體は制作的で

なければならない。かゝる身體的自己として、我々は自覺的であり、人格的でもあるのである。我々はその中に創造的であるのである。そこに歴史的生命が動いて居るのである。従つて我々に對するものは、主知主義者の考へる如き、單に抵抗とか對象とかいふものではなくして、我々の生命に對するものでなければならない。而もそれは唯食物的といふ如きものではなくして、我々を生むもの、創造するものでなければならない。眞の客觀的當爲の聲はそこから起るのである。かゝる當爲は所謂理性の立場から考へられるものではなくして、我々は身體的に物を見る、そこに自己があるといふ立場から考へられなければならない。ヘーゲルの人倫的實體といふものも、歴史的身體的に理解することができるのである。ポイエシスを離れて實踐といふものを考へても、それは主觀的立場を脱することはできない。客觀的世界の底に當爲を考へると云つても、現實を唯有限とか特殊とかと考へ、その直觀性、絶對性を無視して居るのでは、それは尙客觀化せられた主觀の立場に過ぎない。そこに制作といふものもなければ、創造といふものもない。要するに歴史といふものはない。眞の辯證法といふのは、身體的生命をかけた生命の辯證法でなければならない。

二

實踐といふことは制作といふことでなければならない。我々が働くといふことは、物を作るとい

ふことでなければならぬ。制作を離れて實踐といふものはない。實踐は勞働であり、創造である。行爲的自己の立場から世界を見るといふのは、かゝる立場よりすることではなければならない。それが歴史的自己の立場である。意識作用といふものも、此から考へられねばならない。我々が意識するといふことも、歴史的世界に於ての出來事ではなければならない。併しそれは唯、無から物が生ずると云ふことではない。我々の身體は行爲的直觀の世界に於て働くものであり、此世界から生れるものである。此故に我々は制作可能であるのである。單なる意識の底からは、何物をも作ることはできない。我々は自己矛盾的に、即ち歴史的身體的に物を見、而して斯く物を見ることが逆に働くこととなるのである。我々は自己矛盾によつて、物の世界を形成し行くのである。認識作用といふのも、かゝる意味に於ての實踐でなければならない。併し知るといふことと働くといふこととは正反對と考へられる。知ることとは、如何なる性質の實踐であるか。此問題を論ずる前に、私は私の絶對に關する考を明にして置かなければならない。

私は我々の絶對に對する態度に三様あると思ふ。一つは絶對を超越的と考へる。例へば、キリスト教に於て神を絶對に超越的と考へる如きである。人間より神に行く途はない。又一つは當爲といふ如きものから出立して、絶對を無限の果に置くのである。何處までも進み行くべき目的であるが、何處までも達することのできない極限の如くに考へるのである。要するに、かゝる絶對は唯、相對

に對する絶對であつて、相對的絶對たるに過ぎない。併し多くの理想主義者はかゝる絶對を考へて居るのである。右の二つの考へ方は相異なるも、共に絶對を唯、彼岸に見る點に於て一致して居る。尙一つは之に反し（大乘佛教に於ての様）絶對を現實に見る、現實即絶對といふ考へ方である。所謂知識の立場からは、かゝることは考へられないと云ふであらう。併し單に超越的なものは我々に於て何物でもなく、單に否定的に我々に對するものも眞の絶對ではない。眞の絶對は我々を否定すると共に肯定するものでなければならない。所謂相對絶對の對立を越えて而も之を成立せしめるものでなければならない。我々は絶對に於てあると考へるのである、我々はいつも觸れることのできない絶對に觸れて居ると考へるのである。私は永遠が時を包むとか、現在に於て我々が永遠に觸れるとか云ふ所以である。以上の如き絶對に對する考へ方の相違は、人生觀、世界觀の根本的相違に基くものでもあらう。東西文化の根本的に分れる所とも考へることができる。或は絶對を現實に見るといふ如き考へ方は、自然主義とか神祕主義とかに陥ると考へられるでもあらう。而して東洋思想は多量にかゝる傾向を有つて居ると云ふことができる。併し私の云ふ所は、相對と絶對とを唯無差別的に一といふのではない、無差別的に動靜一如などと云ふのではない。現實に於ては、動と靜と、有限と無限と、相對と所謂絶對とが、辯證法的に一であると云ふのである。そこに絶對に結びつかないものが結びついて居るのである、矛盾の自己同一があるのである。そこに我々は行爲的直觀的

に物を見、物が辯證法的に生れ又亡び行くのである。そこに却つて眞の自然といふものがあるのである。我々も身體的自己として、こゝに存在の根據を有たなければならない。自然といへば、唯法則的なものが考へられるが、自然とは自ら動くもの、生きたものでなければならない。然らざれば、それは機械と擇ぶ所はない。矛盾の自己同一として物が生れるといふことは、却つて創造の考に結び附くものでなければならない。所謂自然主義者の自然といふのは、唯對象的に見た自然に過ぎない。眞の自然は創造的でなければならない。創造的なものの根柢には、超越的なものがなければならぬ。超越的なものと内在的なものと自己矛盾的結合が創造といふことでなければならぬ。自然が創造的と考へらるれば考へられる程、所謂自然と反對の意味を有つて來なければならぬ。創造といふ關係によつて、遠き神が近き神である。我々は現實に於て神に面して居るといふことができる。併し私は今宗教問題を論ずるのではない。私は右の如き理由から、古典的物理学が實在界を機械的と考へたのに反して、今日の量子論的物理学が生物的と考へるのに興味を有せざるを得ない (P. Jordan, Anschauliche Quantentheorie, Fünftes Kapitel)。而もそれはアニミスムなどの様に對象論理的に自然を生物視することではない。眞の現實はいつも創造的なものに觸れて居るのである。現實は相反する方向の自己同一即ち矛盾の自己同一として (ボールの相互補足性 Komplementarität の如く)、自己自身を形作るものであるのである。

過、現、未が現在に於てあるといふアウグスチヌスの深い考も、此等のものが我々の心に於てあるといふ彼の語から、單に主觀的と解せられ、又彼は宗教的立場から斯く考へたものとして神祕的にも考へられる。併し私は之に反しそれは能く歴史的現實といふものに基いた時の深い考であると思ふのである。現在は絶えず動き行くものである。併しそれがいつも現在として絶對に觸れて居ると考へられねばならない。然らざれば現在といふものはない。時が永遠の今に包まれ、永遠の今の自己限定として時が成立するといふ所以である。實證的知識の地盤となる現實といふものは、此の外にないのである。自然科學も此の地盤に於て發展し來つたのである。之を神祕といふならば現實は神祕といふの外はない。私はスコトゥス・エリウゲナの創造するが創造せられない神と、創造もせない創造もせられない神と同一であるといふ考にも、それを矛盾の自己同一と見做すことによつて、極めて現實的なものを見るのである。對象論理的にのみ考へる人には、自己が立つて居る足許が見えないのである、而して自己の視野に入り來らざるものは神祕と考へるのである。現在といふのは何處までも結び附かない時間と空間とが結び附いて居る所である。それは何處までも相反する兩方向の自己同一、即ち矛盾の自己同一と考へられるものでなければならぬ。而してそれは自己矛盾的に自己自身を形成し行くものなのである。現在は形を有つたものである。そしてそれは何處までも形作られたもの、與へられたものたると共に、形作り行くものである。それは自己矛盾的に成立

するものなる故に、又自己矛盾的に毀れ行くのである。そこに我々はいつも創造的なものに接して居るのである。自己自身に於て生きるものは、相反する作用例へば生産と消費との自己同一と考へられる如く、我々の歴史的な生命と考へられるものは、時間と空間との矛盾的自己同一でなければならぬ。時といふのは生れる方向である、空間といふのは死し行く方向である。併し物は時間から生れ空間の方向へ消え行くと考へられるが、無から有は出ない。逆に物は空間の方向から生れ出ると考へなければならぬ。時間的・空間的、空間的・時間的に此世界は自己自身を形成し行くのである、即ち辯證法的に、歴史的・身體的に、自己自身を形成し行くのである。我々はかゝる辯證法的世界の要素であるのである。故に我々は創造的であり、制作的である、而して社會的であり得るのである。辯證法的に動き行く經濟社會といふものは歴史的・身體的なものが故である。

我々は考へられたものから考へるものを考へないで、現實の深い把握から出立せなければならぬ、否、現實の直證から出立せなければならぬ。現在に絶えず動き行くものでありながら、いつも現在であるといふことは、歴史的・現在の在に於ていつも過去と未來とが同時存在的といふことでなければならぬ。それは現在といふものが矛盾の自己同一として、そこに無限の過去と未來とが辯證法的に結び附いて居るといふことでなければならぬ。永遠に觸れると云ふのは、何處かに永遠不變なるものがあつて、それに觸れるなどと云ふのではない。矛盾の自己同一といふことは、自ら無に

して形作るといふことでなければならぬ、即ち創造といふことでなければならぬ。併しそれは唯限定するものがないとか、無から有が出るとかいふことではなく、自己矛盾的に働くことが見ることであり、見ることが働くことであると云ふことでなければならぬ、歴史的身體的に物を見ると云ふことでなければならぬ。是故に自己自身を限定する現在即ち現實は、いつも固定せるそれ自身を有しながら、辯證法的自己同一として、内に無限の深さを有つ即ち行先を有つと共に、外に無限の廣がりをもつ即ち周邊をもつ。而して辯證法的に自己自身を變じ行くのである。現實のうつ形といふものは決定せられたもの、固定せるものでありながら、又何處までも動くものである。故に動的靜、靜的動といふ神祕學者の言は、そのまゝ現實の姿である。形といふのは唯靜的なものではない。視覺的形體といふ如きものでも、眼と手との辯證法的統一によつて成立するのである。創造するといふことは辯證法的に物を見出すことであり、逆に辯證法的に物を見出すことは創造することである。我々は此に我々の身體的存在を有ち、我々の生命はかゝる行爲的直觀の現實を中心として辯證法的に動いて居るのである。故に我々人間はいつも自己矛盾的存在である。パスカルの云ふ如く人間はいつも兩極端の中心にある。彼は云ふ、我々は渺茫たる無限の眞直中に航走つて居る、いつも不安に、流されつゝ、彼の果から此の果へ、此の果から彼の果へと (*Pensées*, 72.)。我々の生き行く方向は、唯、辯證法的に物を見て行く、即ち行爲的直觀的に創造し行くにあるのである。

能働と受働、働くことと見ることの辯證法的同一として形を見る。それが身體的に物を見るといふことである。そして斯く身體的に物を見るといふことは我々が物を作ることである。我々はそこに創造的なものに接するのである。云はゞ、時間的方向にも空間的方向にも還元することのできない、私の所謂限定するものなくして限定するものに撞着するのである。普通には創造といふことを唯時間的に考へて居るが、創造といふことは單に時間的に考へられるものでなく、時間的・空間的でなければならぬ。物は時間的・空間的に生れるのである。歴史的生命の辯證法は單に過程的ではなくして場所的でなければならぬ。世界が世界自身を限定すると云ふ所以である。故に現實は何處までも自己矛盾を含んで居る。自己矛盾を含むが故に現實であるのである。而して現實は自己矛盾から自己矛盾へ移つて行くのである。併し斯く矛盾から矛盾へ動いて行くといふことは、世界が無意義に無目的的に動いて行くといふことでもなければ、又世界が一つの目的を以て連續的に動いて行くといふことでもない。我々は現在に於て觸れることのできない絶對に觸れて居るのである。私は今創造的なものに觸れると云つたが、絶對は單に創造的なものでもない。それは一面に創造もせず、創造もせられないものでなければならぬ。絶對の無とか包むとかと考へられる所以である。我々は時の現在に於ていつも時を越えたものに觸れて居るのである、時を越えたものに於てあるのである。此に所謂形といふものの成立する所以のものがあるのである。現實の形といふも

のもそこから定まるのみならず、色々の映像といふ如きものもそこから成立するのである。我々は現實に於て現實を否定するものに接して居る。背理の様ではあるが、その故に現實が眞の現實であるのである。然らざれば現實は單に對象的に限定せられたものたるに過ぎない。かゝる現實から現實が自己同一的に絶對に觸れる所に創造といふものがあるのである。之に反し、現實がいつも自己否定的に周邊を有つといふことも亦此から成立するのである。現實が現實であるには、いつも自己否定的でなければならぬ。現實が現實であればある程、無限の周邊を有つのである。現在が現在であればある程、現在に於て無限の過去未來が同時存在的であるのである。人間は誤るものであり、迷ふものである。それ故に人間は絶對に面して立つものである。人間は墮落するものなるが故に、他に比して偉大なのである。

私の辯證法的自己同一といふのは、主語的に個體的統一を考へるのではない(例へばガイスト)。それから單に創造的なものを考へるでもない(例へばベルグソンの純粹持續)。それをも越えたものである、云はゞ創造もせないものである、變じて變せざるものである。我々の現實はかゝる絶對否定に接して居るのである。その故に現實なのである。そこに現實の深い矛盾があるのである。人から神に行く途はないと云はれる如く、現實からそこに行く途はない。そこには唯絶對の死が待つのみである。故に行爲的直觀の方向に神を見るのではない。私が現實に於て絶對に觸れるといふのは、さ

ういふ意味に解せられてはならない。却つてその逆に於てである（此問題を明にするには宗教について論せなければならない）。我々は絶対にそれに觸れることができないといふ意義に於ては、それは絶対の無である。併しそれによつて世界が成立するといふ意義に於て、それは絶対の有である。それを辯證法的實體といふことができる。而も斯く云ふのは、現實の外に物自體の世界を考へることではない。現實を離れてさういふ世界があると云ふのではない。然らばと云つて現實はそのまゝ實在だと云ふのではない。現實はいつも自己否定的である、現實はいつも現實を越えたものである（現實は自己批評的である）。その故に現實は生きたものであり、現實が現實であるのである。物質は辯證法的に動き行くものと云つても、現實の一々の段階を唯相對的と考へるのでは、物質自身の自己同一性といふものはない。従つてそれは却つて物質を主觀的に考へることである。實在が辯證法的と云ふには、一々の段階が有限であり、相對的であると考へられると共に、その一々の段階が絶対に觸れるといふことがなければならない（現在に於て過現未が同時存在的であり、時が永遠に觸れると考へられる如く）。然らざれば、辯證法的世界に於て物と物との對立、絶対的對立の根據はない。従つて辯證法といふものは成立せない。唯物論的辯證法の方でも、主觀主義に於ては相對は唯相對であり、絶対に排除するが、客觀的辯證法に於ては相對に於て絕對が見出されると云つて居る（Lenin, On dialectics）。之に反し現實が現實でありながらいつても現實を越えるといふことから、

現在の社會が非現實的となり、周邊的に移行行くことも可能である。そこに實在が實在自身を失ふのである。「連續と非連續との問題についても、私は從來論じ來つた如く、時間的・空間的、空間的・時間的なる歴史的實在の世界は何處までも非連續の連續と考へるものである。然らざれば、此世界は現實的ではなく、唯可能の世界である。現實がいつも絶對に觸れて居るといふ意味に於ては、實在は絶對連續と云つてよい。絶對の無は絶對の有といふと同一である。併しそれは單に同一といふのではない。現實そのまゝが絶對であるといふのではない。世界は現實に於て觸れることのできないものに觸れて居るのである。そこに非連續の連續があるのである。」

私は是に於て我々が歴史的現實に於てありながら、之を越えて之を映すと考へられる根據を明にし得ると思ふ。現實はいつも現實であり、現實から現實へ移行行きながら、いつも現實は現實自身を越えて居るのである。そこにはいつも絶對に觸れると考へられるのである、否、觸れることのできないものに觸れると考へられるのである。それは背理ではあるが、背理なるが故に現實なのである。現實は右の如き意味に於て自己矛盾的なるが故に、一面に自己肯定的なると共に、一面に自己否定的であり、現實は現實を越えて絶對的なものを映すとも考へることができるのである。無論、現實が現實を越えるといふことは、現實を離れて現實の外に立つことではない。いつも現實から現

實を越えるのである。歴史的生成を離れて、知識の立場といふものがあるのではない。意識一般といふ如きものでも、歴史的生成の立場を離れるのではない。

我々が身體的に物を見、見ることによつて働くといふことは、自己矛盾的に物を見ることである。始に云つた如く、我々の生命は相反する働きの矛盾的自己同一にあるのである。例へば、生産と消費との矛盾的自己同一といふ如きである。而も生産と消費との結合は、唯直接的であつてはならぬ、本能的であつてはならぬ。それは矛盾の自己同一ではない。生産の主體としての社會は自己自身を形成するものでなければならぬ。斯く歴史的身體的に形成すると考へられる所に、我々はいつとも自己矛盾的に絶對に觸れるのである。そこに、見るといふことと働くといふこととの矛盾的自己同一があり、世界が創造的であるのである（歴史的な自然といふものが働いて居るのである）。そこが自己自身を限定する現在と考へられる所であり、そこにいつも無限の過去と未來とが同時存在するのである。そこに周邊なき圓の中心があるのである。そこに絶對に相反する方向の相互補足的なる世界の焦點があるのである。我々人間とは、かゝる現在を中心として過去未來が何處までも同時存在する絶對矛盾の世界の要素であり、逆に世界がかゝる現在を中心として自己矛盾的に自己自身を形成し行く所に、我々は行爲的直觀的に物を見るのである。そこに我々は創造的なものに接すると考へられるのである。そこに眞理といふものが考へられるのである。

實踐が制作であり、我々の行爲が表現作用的であるといふことも、現實が絶對に觸れ、自己自身を越えて、自己自身を形成し行くことから云ひ得るのである。そこには無限の過去未來が同時存在的である。そこでは我々は身體的であり、我々の行動は制作的であると共に、我々に對するものは限定するものなきものの限定として何處までも表現的であるのである。而してその自己矛盾的に絶對に觸れると考へられる所に、我々は制作的であり、眞實を表現すると考へられるのである。直接といへば、すぐに無媒介と考へられるが、現實は媒介せられたものでなければならぬ。辯證法的世界に於て媒介せられない何物もない。辯證法的世界に於て單に與へられたものと云ふものはない。すべては歴史的に生成したものである。斯くすべての物が媒介せられたものたると共に、絶對辯證法的世界に於ては何物も單に媒介せられたものと云ふものはない、媒介せられないものが媒介するものである。眞に具體的なものは、直接なるものは、自己自身を媒介するものでなければならぬ。何處でも自己矛盾的に絶對に接するといふことができる。辯證法の論理といふものも、そこから成立するのである。(未完)